殲滅眼を持ちし者

dai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
殲滅眼を持ちし者

【Ｎコード】
Ｎ２５７１Ｍ

【作者名】
ｄａｉ

【あらすじ】
この作品は伝説の勇者の伝説の殲滅眼ってネギまの魔法関係者にとって天敵じゃね？
などと思った作者が考えた妄想話です。
かなりの独自展開になっていくと思います。
感想いただけると狂喜乱舞します。
※Ａｒｃａｄｉａにも投稿しています。

プロローグ「まだ胎児なのに」

初めまして、転生系オリ主（たぶん？）です、名前はまだありません。

なぜ名前がまだないかというと、まだ母親の胎内にいるからです。

まあ、転生に関してはテンプレでしたので説明は省きます、死ぬのってとっても痛かったですとだけ言っておきます。

転生ものの二次創作が前世では大好物だった自分としても、実際に自分がこのような立場になってみると感慨深いものです。

生まれ出るまでは何もできず暇すぎるので、自分が転生したのはどういったところなのだろうと妄想するだけの日々を過ごしております。

そんな胎児ライフを送っていた私に、数ある転生系オリ主のほとんどの方々が直面してきた死亡フラグというやつが立っちゃいました。

まだ胎児なのに！まだ胎児なのに！

神様、いくらなんでもフラグ立てるの早すぎないですか？

そして栄えある私の死亡フラグはこれです。

『最初のエサをやろう。その下等な人間を、喰らえ』

察しの良い方はお気づきかと思いますが、これはあれです、小説「伝説の勇者の伝説」に出てくる殲滅眼（イーノ・ドゥーエ）という魔眼保持者が母親の胎内にいる産み月に天から降ってくる声です。

おかしいと思ったんですよ、胎内にいるのに意識がはっきりしてるしね。

ですが自分が殲滅眼保持者であるというなら納得です。

原作でも殲滅眼保持者は産み月に魔眼が開眼して意志も持っているという描写がありましたし納得です。

しかし伝説の勇者の伝説、本で読む分には面白くていいんですが、実際その世界で生きていくとなるとかなりやばいです。

人がゴミのように死んでいく世界です。

しかも私は魔眼保持者です、一般人からは怯えられたり迫害されたりしますし、ガスタークという国からは魔眼を奪うために命を狙われたり、他の国からも生体兵器として扱われたりと嫌な未来しか思い浮かびません。

とりあえず、人食いの趣味はないので声は無視しています。

でも胎内にいる私に向って声を掛ける母（推定）の声がとても慈愛に満ちていて、いい人そうなので生まれた私が魔眼保持者と分かって、母（推定）に迷惑がかからないか心配です。

ほら、魔眼保持者の親って主人公のライナの親といい、アルアの親といい、魔眼保持者でも気にせず子供を愛していて大変な目にあっているじゃないですか。

そんな感じで死亡フラグが立ってからはこれからの人生どうしたものかと悩む日々を過ごしております。

まだ胎児なのに！！！

そうして私の母の胎内での生活にようやく終わりがやってきました。

俺誕生！！！ってやつです。

生まれた私がおぎゃあおぎゃあと泣いていると、助産師さん？から私を受け取り抱き上げた母がこう言ったのです。

「初めまして、私のかわいい息子。あなたの名前はネギ、ネギ・スプリングフィールドよ。」

えっ、伝説の勇者の伝説じゃなくてネギまの世界ですか？

第一話「ひたすら原作ブレイク」

どうもこんにちわ、何の因果か殲滅眼なんて厄介な魔眼を持って転生しちゃったネギ・スプリングフィールドです。

只今メルディアナ魔法学校の卒業式に出席しています。

「卒業証書授与――アンナ・ユーリエウナ・ココロウァ君」

父兄参加的な意味で……仕方がないんだよ、魔法が使えないんだよ、殲滅眼保持者だから（涙）。

「はい！」

おっと、嘆いていないでちゃんと拍手しないと、アーニャにばれたら後で怒られてしまう。

もうお分かりかと思いますが、現在私は幼馴染のアーニャの卒業式を見に来ています。

ちなみにアーニャは首席卒業です。

卒業証書授与も無事終わり、卒業生に対して校長先生からありがた～くも長いお話が始まるので、この間にこれまでのことをお話ししたいと思います。

～0歳編～

予想外のネギまの主人公ネギとして新たな生をうけた私はこれからのことを改めて考えました。

なんせ自分的には伝勇伝の世界に生まれるとばかり思っていましたから、それ前提でいろいろ考えていたわけですよ。

そんなわけで今後のことを改めて考えるわけです。

まず最初に気になったのは

私の持っている殲滅眼はこの世界で知られているのだろうか？

というものです。

迫害とか怖いじゃないですか？

本来ネギまの世界にはない別世界の魔眼です。普通ならだれも知らないわけですが、油断できません。二次創作なんかでは世界観が混ざっていたりは普通にあるのですから。

まあ、この問題は私の眼を見ても誰も特に反応しないので、どうやら殲滅眼のことは知られていないようです。

存在が確認されていれば、魔法世界の王女である母や英雄である父が気付かないはずがありません……いや父の方は知らないだけという可能性がありますが、私は母を信じます。

続いての問題は私が殲滅眼保持者ということです。
将来のため自分の覚えてる限りの殲滅眼の特徴を思い出してみたときに気がつきました。

殲滅眼

・発動時には瞳の中に朱の十字が表れる。

・世界の魔道学における気の流れ、もしくは精霊と言われているものを吸収することにより超人的な身体能力を得ることができる。

・魔法、もしくは人間の肉体を直接喰らう事によって効率よく力を得ることが可能である。

・空間から直接精霊を吸収する事によって力を得ることもできるが時間が掛かり得られる力も小さい。

・瞳が無意識に空間の精霊を吸収してしまうため上手く魔法の構成が創れず、自らは魔法を全く使うことができなくなっている。

そう、特徴の一つ目から四つ目から問題ないんです、いや人間を食べるというところはどうかと思いますが食べなきゃいいわけですし。

しかし五つ目

『瞳が無意識に空間の精霊を吸収してしまうため上手く魔法の構成が創れず、自らは魔法を全く使うことができなくなっている』

そう『自らは魔法を全く使うことができなくなっている』という一点が問題なんです。

生まれた時点で魔法先生ネギまの根本フラグをボッキリと折っているのです。

魔法がメインのファンタジー世界で魔法が使えない（涙）……どうせ魔眼なら複写眼が良かったな～。魔法のコピーし放題だし。

二つ目の特徴から考えて気の方も使えないんでしょう。

安西先生、魔法を気を使ってみたいです（涙）。

まあ仕方ありません、魔法や気が使えないのは残念ですが、非常に残念ですが、殲滅眼だって強力な力ですから前向きに考えることにします。

他にも自分以外に魔眼保持者がいるのだろうかとか、母の胎内にいる時に天から声が聞こえったってことは伝勇伝の性質の悪い神ないし悪魔がこの世界にいるのかといったことも考えましたが、今考えてもどうしようもないので先送りにすることにしました。

～3歳編～

いつの間にか父も母もいなくなっており、現在原作通り小さな山間の村で一人暮らしをしています。

学校休みには従姉のネカネ姉さんが様子を見に来てくれますし、普段はアーニャの両親やスタンじいちゃん、村の大人たちが代わる代わる面倒を見に来てくれているので何とか生活できています。

そして、とうとう初心者用魔法の杖を渡されました。

私は魔法が使えないが分かっていたので、周りの大人たちに魔法が使えないのを知られた時に失望や侮蔑などといった感情がむけられないか心配になりましたが、それは杞憂でした。

私が魔法が使えないとわかった時のスタンじいちゃんの言った言葉は今も私の心に刻まれています。

「ぼーず、お前さんは魔法が使えないが、悪ガキのナギと違って頭はいいし、運動神経の方もかなりのもんじゃ。魔法なんかに拘らずお前さんが思う通り好きなように生きるんじゃ。」

そう言ったあと、スタンじいちゃんは私の頭をただ撫でてくれました。

村のみんなもそれまでと全く変わらず接してくれています。

流石は父であるナギを慕って住み着いた人が多い村、流石は赤松ワールド、みんないい人ばかりです。

こんないい人たちが悪魔に襲われて石化されてしm……わ、忘れてた〜、魔法が使えないことばかり気にしていて、ネギの人生最初の

死亡フラグ（悪魔襲撃）をすっかり忘れてた！！！

もういつ来てもおかしくない。

何とか、何とかしなければ。

村の人たちに警告する……子供の言うこと信じてくれるわけがない、下手したら変な目で見られてしまう。却下。

殲滅眼を使って無双する……悪魔を喰いたくないし、悪魔の魔法を喰うことで超人的な身体能力を持ったとしても、武術の心得もないし、人以上の身体能力を持っているだろう悪魔の軍団に勝てると思えない。無理。

原作通り父に助けてもらう……自分というイレギュラーがいることから考えても、原作通りに事件が終わるとは考えられない。不採用。

強い人のところに逃げる……そう、おそらくあの悪魔襲撃は私ことネギ・スプリングフィールドを狙った事件のはず、私がいなければ村も襲われないはずです。採用。

まだ子供の私は素直に大人に頼ることにしましょう。

さて、強い人のところに逃げるとして、誰のところがいいですかね？

赤き翼のメンバー……彼らなら悪魔襲撃もへっちゃらでしょう。しかし、今の私は彼らを知らないことになっていますし、周りの人が納得する彼らのところに行く理由がない。

麻帆良学園……学園長やエヴァンジェリン、魔法先生達がおり、結界が張っており、一般人も多く住んでいるので悪魔襲撃なんてものが起こるはずもありません。しかし、これも上と同じ理由で無理です。

麻帆良学園が一番理想的なんですけどね～、赤松ワールドでのほほんと暮らしたいです。

しかしどうしよう、逃げる先が思いつきません。

悪魔襲撃も原作通りならネカネ姉ちゃんがメルディアナ魔法学校から帰ってくる2か月後n……それだー！！！

メルディアナ魔法学校に逃げればいいじゃん。

あそこには校長先生やってるじいちゃんはいるし、ネカネ姉ちゃんもいる。

家族と一緒に暮らせなくてさびしいという理由であっちに引っ越す理由も問題なし、実際一人暮らしはさびしいですし。

強さもメルディアナ魔法学校の学園長をしているじいちゃんや魔法学校の先生がいるから問題ないはずですし、魔法学校なら防御結界の一つや二つ張っているでしょう。

なぜ最初に思い浮かばなかったんでしょう。

しかし、思いついたからには私の勝ちです、いざ突貫！！！

「おじさ～ん。おばさ～ん。（アーニャの両親です）」

～数十分後～

無事、説得完了です。

説得方法はあれです。

一人はさびしいとか、おじいちゃんやお姉ちゃんと一緒に暮らしたいとか子供らしく泣きわめきました。

ちょっと…いやいや、すごく恥ずかしかったです。

でも、原作のネギと違い物わかりのいい子供として過ごしていたのが良かったのか、今まで子供ながらに我慢していたと考えたアーニャの両親やスタンじいちゃんが私をメルディアナ魔法学校に引っ越しさせると決めてくれました。

ふふっ、計画どおり！！！

死亡フラグ（悪魔襲撃）消滅

～メルディアナ学園編（7歳）～

悪魔の襲撃から逃れるために、メルディアナ魔法学校にやってきたネギです。

別に魔法学校に入学したわけではありません、私は魔法どころか魔力も扱えませんから入学できません（涙）。

単に現在、校長をやっているじいちゃんの教師寮の部屋に住まわせてもらっているというだけです。

それはそうとアーニャの両親かスタンじいちゃんから事情（さびしいとか言いながら泣きわめいた件）を詳しく聞いていたみたいで、じいちゃんやネカネお姉ちゃんはかなり私をかまってくれています。

今もじいちゃんとティータイムを楽しみながらのんびりとしています。

そんな死亡フラグを気にする必要もなくのんびりと第二の人生を満喫している私ですが、問題が何もないわけではありません。

以前住んでいた村と違い、ここには私を英雄の息子という目で見て、魔法が使えないとわかるとあからさまに失望したり、残念がる大人がごく少数ですが確かに存在します。

これは家族のように生まれた時から接してくれていた村のみんなと違い、彼らには英雄の息子と言う前情報しか持っていなかったという違いのせいかと思います。

まあこういう人たちはこちらから近付いていかなければ何も問題ありません。

ですが、私と同年代の魔法学校の生徒の中には、魔法が使えないことをネタに何かと私にちょっかいを掛けてくるグループができたのが問題でした。

いじめというほどではなかったので、無視していればそのうち飽きるだろうと楽観視していたのですが、甘かったです。

なかなか飽きてくれません、むしろ最近はエスカレトーしてきたような気がします。

しばらくしてその理由が判明しました、ちょっかい掛けられている時よくアーニャがやってきて私をかばってくれていたのですが、アーニャが来てからのグループのリーダー格の男の子の私を見る目に嫉妬の感情が含まれていたのです。

あ～なるほど、これではちょっかい掛けてくるのをやめてくれるわけがありません、彼からすれば魔法も使えない私に自分の好きな女の子が仲良くやっていれば面白くはないでしょう。

しかし、私にアーニャと距離をあけて、この問題を解決するという選択肢はありません。

なぜなら…なぜならアーニャにネギフラグを立てられているからです（爆）

アーニャフラグではありません、あくまでネギフラグを立てられているのです。

仕方がないんです、肉体に引っ張られる形で精神年齢もかなり引き

下がっているみたいで同年代の女の子も十分恋愛対象として見れちゃいます。

そして何よりアーニャはいい子です。

生まれた時からそばにいましたし、魔法が使えないと知った時も

「そんなの気にすることないわよ、それにほら…えっと…その…なんなら私のミニステル・マギになればいいじゃない。べっ、別にアンタとパートナーになりたいとか、将来夫婦にとか思ってるわけじゃないんだからね！」

なんて素直じゃないけどうれしい励ましの言葉をくれましたし、今もこうしていじめっ子グループから私をかばってくれています。

もう最近は将来アーニャのミニステル・マギになって彼女を守っていけばいいかなどと本気で考えております。

そのために最近は殲滅眼を使いこなすためにも、街にあるボクシングジムにいって体の動かす術を学んでいます。

殲滅眼が無意識に周りの空間の魔力や精霊を吸収しており、肉体をかなり強化してくれているので、まだまだ未熟な子供の体ながらそれなりに形になっております。

私的には原作でもエヴァンジェリンが使っていたような柔術や合気道などといった相手の力を利用する武術が好みだったのですが、ここはイギリス、そんなもの教えてくれるところが近くにはありませんでした。

少し話がそれましたが、アーニャのミニステル・マギを目指す私に、彼女との距離をあけるという選択肢はありません。

後日彼と拳を使ったＯＨＡＮＡＳＨＩで無事問題を解決しました。

流石は殲滅眼、魔法使いのガチンコ対決では無敵です。

相手が魔法使ってきてもこっちを強化するだけですし、私と違って彼は格闘技とかやっていませんでしたからね。

アーニャのミニステル・マギフラグＯＮ

～そして現在へ～

とまあ、これが原作開始時期メルディアナ魔法学校卒業式までの私ネギ・スプリングフィールドのこれまでです。

魔法使えないのでしょうがなかったんですが、原作の影も形もありません。

まあ、原作のネギの人生ではなく、これは『私』の人生なので予測のつかない未来の方が面白いですよね。

アーニャの従者として彼女の修業先についていくので、今はこれか

らのロンドンでの生活に期待をはせています。

「ネギ～。」

おや、アーニャがこちらに走ってきます。

どうやら修業先も決まり、私にも伝えに来てくれたようです。

「アーニャ～、修業先は何だったの～。」

「えっとね、日本で魔法生徒をすることだって。」

……えっ、ロンドンで占い師をするんじゃないの？

第一話「ひたすら原作ブレイク」　（後書き）

散々原作ブレイクな人生を歩いていたくせに、アーニャの修業先は原作通りだと思っていたネギの巻。

またここのネギはアーニャ一筋、他にフラグを立てようとか考えていません。

ネギの殲滅眼のことを詳細に知っているのはアーニャだけです。

パートナーになるときにネギから話しています。

魔法学校のじいちゃんやスタンじいちゃんなどといった実力者でも魔法無効化能力者かもと思っている程度です。

殲滅眼で得た超人的な身体能力も気や魔力をまとっているわけではないですし、ネギもセーブして動いていますので、天才的な運動神経だと思われる程度にとどまっています。

第二話「弟子入り」

～日本・羽田空港～

「日本よ、私は帰ってきた～！！！」

「何バカなことやってんのよ。」

ドスッ

「グフッ。」

第二の人生初めて早9年、とうとう魂の故郷に帰ってきたせいでテンションが鰻登りのネギです。

ちょっとテンションあがりすぎて馬鹿やってしまいましたが、大目に見てほしいです。

やっぱり、日本は良いです、正確には前世の日本とは違いますが雰囲気はやはり同じものを感じます。

まあ、馬鹿やるのはここまでにして、麻帆良学園都市に向かうとしますか。

～学園長室～

数あるオリ主・クロスオーバー主人公が驚愕した学園長，Ｓヘッドを生で見てるネギです。

これは確かに驚愕せざるを得ない、人間の頭じゃ断じてね～よ。

仙人骨でも持ってるんじゃなかろうか？

まあ、口にも顔にも出しません、第一印象って大事だしね。

「フォ、フォ。なるほど修行のために日本の学校で魔法生徒を…そりゃまた大変な課題をもろうたのー。」

「はい、よろしくお願いします。」

「アーニャ君、この修行はおそらく大変じゃぞ、表の普通の生徒と魔法生徒の二足の草鞋をはかねばいかん。両立が大変じゃ。そしてダメだったら故郷に帰らねばならん。二度とチャンスはないがその覚悟はあるのじゃな？」

「は、はいっ。やります。やらせてくださいっ。」

「従者のネギ君も良いかの？」

「問題ありません。」

「よろしい。それではアーニャ君は女子中等部２－Ａに、ネギ君の方は男子中等部２－Ａにそれぞれ長期留学という形で入ってもらうからの。」

「「はいっ？」」

「いや、ちょっと待ってください学園長。僕もアーニャも９歳と１０歳ですよ。小等部に通うんじゃないんですか？」

いやいや、ここにきてあの原作メンバーがいる２－Ａにアーニャが転校するとか……なんでやねん。

ここにきて歴史の修勢力というか原作の修勢力が働いたのだろうか？もう散々引っかき回して原作の影も形もなかったからこのまま小等部でのほほんと魔法生徒ライフをエンジョイするつもりだったんだけどな～。

「いやなに、これには訳があっての。アーニャ君の転校予定の２－Ａには魔法生徒や魔法関係者が集まっておるんじゃ。異国の地に修行にやってきたアーニャちゃんには身近に相談できる相手がいた方が良いじゃろう？あいにく本来の学年には魔法関係者がおらんのでの。従者のネギ君もアーニャ君と同じ学年にしておけば予定を合わせやすいじゃろうし、２人共学力は大学卒業レベルはあるし、イギリスでは飛び級しておったことにすればいいしの。」

なっ、なるほど。

原作のネギみたく、魔法関係者のことを教えられないというわけではないんだし、こういう理由できたか、先生やるよりは違和感ない

わな。

いや、小等部にはココネとかいたと思うんだけど、年下なんだろうか？てっきり同い年だと思ってたけど。

まあ、ということはあれかな、修学旅行の事件は巻き込まれる可能性があるんだろうな～。

アーニャを守んないといけないし本腰入れて修行する必要があるかな。

「そういうことでしたら、僕には異論ありません。」

「私も問題ありません。むしろ気を使っていただいてありがとうございます。」

「フォ、フォ。いいんじゃよ。…ところでネギ君には彼女はおるのか？どーじゃな？うちの孫娘なぞ。」

「いえ、僕にはアーニャがいますので。」

「なっ／／／／。」

「フォ、フォ。若いの～。それではそろそろ2人をそれぞれの教室に案内しよう、高畑先生、弐集院先生。」

「「はい。」」ガチャ

「高畑先生のことはわかっとるじゃろうが、弐集院先生も魔法使いじゃから、表のことでも魔法関係でも何かあったら相談するといい

じゃろう。ほかの魔法関係者は身近のものは2人に声をかけるように言っておるし、他の者は後日改めて紹介しよう。」

「「よろしく、ネギ君、アーニャ君。」」

「「はっ、はい。よろしくお願いします。」」

〜放課後・女子中等部教室〜

なぜか、アーニャの歓迎会に参加しているネギです。

まあアーニャに呼ばれたからなんですが、２－Ａのみんながアーニャと一緒に転校してきた幼馴染の男の子を見たかったそうです。

「アーニャちゃんの一個下ってことは9歳なんでしょ？それにしては落ち着いた雰囲気があるね。」

「そうですかね。」

「趣味は〜？」

「ボクシングと読書です。」

「読書って何読むの？」

「ミステリとかファンタジーとか小説なら割と何でも。」

「ネギ君、結構かわいいしモテルでしょ。彼女は？あっ…もしかしてアーニャちゃん？」

「はい、アーニャが彼女ですよ。」

「やっぱりそうだったんだ、ねえねえアーニャちゃんのどこが好き？」

「え～っと、まあ優しいとことか、かわいいとことか、全部ひっくるめて好きですよ。」

「つっ／／／／。何恥ずかしいこと言ってんのよ、この馬鹿ネギ。」

ドスッ

「グフッ。」

「「「「キャ～～～～！！！だいた～ん。」」」」

最初は女子中学生パワーによる質問攻撃に内心ビビりながら質問に答えていましたが、アーニャのことを聞かれ始めれば問題ありません。

いくらでも惚気話してやんよっ！！！

とまあこんな感じで惚気話をたりしながらアーニャの歓迎会を楽しんでいると、

「やあ、ネギ君。楽しんでいるみたいだね。ここのクラスの娘達は

みんな元気でいい子たちだろう。ネギ君は自分のクラスの方にももう慣れたかい？」

「あっ、タカミチ。そうだね、みんないい人みたいだし、これならアーニャも大丈夫そうで安心したよ。僕のクラスもみんないい人ばかりですぐ溶け込めそうだよ。」

「そうかい、それはよかった。」

「そうだ、あっちのことで相談があるから後で時間作ってもらってもいい？」

「そうなのかい？もちろんいいよ。」

「じゃあ、遅いし後で僕の部屋においで。あそこなら話しても問題ないだろうし。」

「ＯＫ、それじゃ後でお邪魔するよ。」

よし、それじゃあ、タカミチのとこに行くまでこの歓迎会を楽しむとしますか。

～タカミチ，ｓ　ルーム～

「それでどうしたんだい、ネギ君？魔法関係の相談って一体？」

「実はタカミチに弟子入りさせてくれないかな～と思ってるんだけど。」

「でっ、弟子入りかい？それはまたどうして？」

「うん、実はアーニャの修行も始まることだし本格的にミニステル・マギとして鍛えようと思うんだ。それで僕って魔法も気も使えないじゃん、身体能力はかなりのもんだけどさ。そこで、同じ魔法が使えないタカミチなら魔法が使えない者の対魔法使い戦のアドバイスとかもらえないかな～と思ってさ。」

「なるほど、そういうことなら僕もまだまだ未熟だけど及ばずながらネギ君の力になるよ。」

「ありがとう、タカミチ。先生になってもらうんだから模擬戦してくれない。アーニャにしか教えてない力もひっくるめ僕の今の全力をみせるからさ。僕の全力が知ってた方が鍛えやすいでしょ。場所は誰にも見られないところがいいんだけど。」

「いいとも、今のネギ君がどれだけのものか見せてもらうよ。」

第二話「弟子入り」（後書き）

タカミチに弟子入りするの巻

魔法も気も使えないネギ君の師匠になれそうなのは彼しかいないかと。

ここのネギは目も悪くなく眼鏡なし、要するに原作ナギモードみたいな感じです。

そしてようやく殲滅眼を使ったバトルな展開になります。

第三話「殲滅眼はやっぱりチート」

Ｓｉｄｅ．タカミチ

今、目の前にナギさんの息子であるネギ君がいる。

ナギさんにあこがれ今なお追いつけた気がしないけれど、彼の息子が僕に弟子入りし、力試しに模擬戦をしようとしていることに時の流れを感じずにはいられない。

「行くよ、タカミチ。」

「ああ、来たまえネギ君。」

さあ、君の力を僕に見せてくれ。

『闇よ、あれ。』

ネギ君の言葉と共に彼の足もとから闇色の獣が６体僕に向かって四方から襲い掛かってくる。

とんでもないスピードで襲いかかってくる獣を居合拳で叩き伏せていくが、その獣のスピードに背筋が寒くなる心地だった。

あのスピード、動体視力と速さが一流のものでなければ反応できず

に食いちぎられること間違いなしだろう。

しかも僕の居合拳で吹き飛ばされてもすぐに起き上がりまた襲いかかってくる。

牽制用の居合拳で３・４発当てれえば消えていくところを見ると耐久力はそれほどのものではないみたいだけど、消えたそばからネギ君の「闇よ。」の言葉と共に消えた分だけ新たな獣が呼び出されてくるからかなり厄介だ。

ネギ君は魔法が使えないから、これはおそらくアーニャ君との仮契約で手に入れたアーティファクトの能力なのだろうけど、かなり厄介な能力を持ったレアモノのようだ。

僕に襲い掛かってくる６匹の隙を突いてネギ君自身に無音拳を飛ばしても闇色の壁が出現し攻撃を防いでしまう。

ネギ君はアーティファクトの能力を使って後衛型の従者としてうまく戦っていると言っていいレベルにすでに至っていると見ていいのだろう。

このままではらちが明かないし、そろそろ少し本気を出すとしようかな。

「ネギ君、今から僕のとっておきを見せてあげよう。」

『右手に気、左手に魔力…合成』

「ネギ君、全力で防ぎたまえ。」

『豪殺・居合拳』

咸卦法で威力を最大限に上げた居合拳が襲い来る獣も闇色の壁もネギ君もまとめて吹き飛ばす。

ネギ君はとっさに壁だけじゃなく、獣のうちの半分を防御側に回したようでまだ意識はあるようだ。

「ネギ君、どうする？今日はここまでにしておくかい？」

「まだまだこれからだよ、タカミチ。今度はこっちがとっておきを見せる番さ。」

そう言いながら、力のこもった眼で僕を見つめ返してくるネギ君にナギさんと旅したころのワクワクした気持ちがよみがえってくる。

ネギ君がいったい何を見せてくれるのか楽しみで仕方がない。

しかしこの後僕が覚えているのはネギ君の言葉と共に力が抜ける感覚と共に腹部に突き刺さるネギ君の拳の感触だけだった。

Ｓｉｄｅ．ネギ

現在タカミチと模擬戦中のネギです。

しかしタカミチマジＴＵＥＥＥＥ。

アーティファクトの黒叡の指輪を使った攻撃がことごとく撃退されています。

そうです、自分のアーティファクトは伝勇伝に出てきたミラン・フロワードが持っていたあの指輪でした。

まあ原作と違って魔法使いじゃないですし、中の人も違いますから原作のアーティファクトと違うのは当たり前といえば当たり前なのかな。

しかし、アーニャと仮契約して初めてアーティファクトを出したときはショックだったね。

持ってる魔眼は殲滅眼、持ってるアーティファクトは黒叡の指輪……これ完全に悪役サイドのステータスのような気がするんだけれどｏｒｚ

なんか変なフラグが立たなきゃいいけどと思う今日この頃です。

しかし、伝勇伝でもあのライナが魔法で脳のリミッターを解除しなければ反応できなかった闇の獣をあっさり居合拳で迎撃してるし、タカミチの居合拳のスピードは流石といえる。

まあ威力は一発で獣たちが消えないところから見てもそれほどでもないのかな、本気になられたら分からないけど。

しかし居合拳か～、弟子入りしたからにはタカミチにはぜひとも教えてもらいたい技である、居合拳は威力を調整すれば原作のタカミチが武道祭の予選で使ったように必要以上相手を傷つけずに無力化できる技というのが大きい。

魔法の使えない自分にとってポケットを刀の鞘の代わりにして「拳圧」を打ち出すこの技なら、通常時の自分でも放てるかもしれないし、殲滅眼を発動させて更なる強化をした状態なら豪殺・居合拳クラスの威力が出せるかもしれない。

そんなことを考えているとタカミチが少し本気になって咸卦法を使って豪殺・居合拳で獣と壁ごとまとめて吹き飛ばされた。

豪殺・居合拳の半端ないダメージにふらつきながら立ち上がると、タカミチがそろそろやめておくかと聞いてくる。

しかし、こっちとしては殲滅眼がどれほど使えるかを試すのが今回の模擬戦の最大目的。

原作のアスナや木乃香のようにレアスキルやら、強大な魔力を持っているのが周りにばれると狙われたりするのはわかりきっていてこの力を試す機会がなかった自分としては、タカミチならかつての父の仲間だし、アスナを守っている点から考えても黙っていてくれるだろう。

「まだまだこれからだよ、タカミチ。今度はこっちがとっておきを見せる番さ。」

さあ、殲滅眼の初お目見えだ！

『力を喰らう』

殲滅眼を発動するとまずアーニャとの仮契約のつながりが途切れアーティファクトも消滅し、吸収したタカミチの咸卦法のエネルギーが全身にいきわたる。

ダメージもなくなり、軽くなった体でタカミチに向かって突き進む、逆にタカミチは咸卦法がとけ、何の強化もされていない状態に強制的にされたせいでこちらのスピードに全く反応できていない。

そしてそのまま、タカミチのボディーに死なない程度に右ストレートを叩き込んだ。

崩れ落ちたタカミチの意識がないことを確認し、緊張の糸を緩めつつ、殲滅眼の有用性を実感した。

やはり初見での対魔法使い戦でのこちらのアドバンテージは大きい。

こちらは相手の魔法で強化され、相手は強制的にただの人状態に陥るというこちらとしてはおいしすぎる展開に持って行ける。

こちらの能力が相手に知られいろいろ対策が練られてしまえば今回ほどあっさり勝ちを拾うことはできないだろうけどね。

あとちなみに殲滅眼を発動させて仮契約のつながりは途切れてしまったことは、以前にアーニャと2人で殲滅眼の力をいろいろ試しているときに解っていたので問題ない。

というか仮契約ができただけでも儲けものだった、殲滅眼を発動させると周りの気・魔力・精霊を喰らう際に一緒に仮契約の力も吸収してしまうということだろう。

殲滅眼と黒叡の指輪を同時使用できないのは残念だけど、まあ世の中そんなにうまくはいかないということかな。

ただ仮契約が切れるたびに恥ずかしがってなかなかイチャイチャさせてくれないアーニャと仮契約のキスができるのは正直おいしいと思う。

「う～ん。」

おっとタカミチが目を覚ますみたいだし、この眼のことを説明しないとね。

第三話「殲滅眼はやっぱりチート」（後書き）

やっと殲滅眼を使ったバトルが書けた！！！

一瞬で終わったけど、でも初見だとこういう結果以外ないかなと思います。

原作のネギＶＳタカミチでもタカミチは受けの姿勢であまり警戒とかしてないですし。

ネギのアーティファクトはこんな感じに、原作とは違います、まあ中身も違いますし…

これからも余程のピンチ以外は殲滅眼は使わずアーティファクトを使ったスタイルでネギは闘っていきます……たぶん。

アーティファクト説明

名称：黒叡の指輪

形状：右手中指にはめられている漆黒の指輪

能力：＜闇の獣を作り出す＞

闇の獣の素早さは伝勇伝の魔法で加速状態のライナとほぼ同程度だが、　戦闘能力は経験などの点で劣る。

また、通常のライナでは反応できない速度である。攻撃は噛み付き

等肉弾戦のみ。

防御力はライナの魔法に当たったり、剣で斬られると消滅するくらい。

無限に闇の獣は出せるが、同時に出せるのは６体まで。

＜闇でできた悪魔を作り出す＞

悪魔の攻撃手段は拳打や爪による攻撃など肉弾戦のみ。

頭を吹き飛ばされたり、腕を切り落とされても再生できる。

頭や片腕がない状態でも戦闘できる。

切り落とされた腕を単体で動かし攻撃することもできる。

素早さは加速状態のライナよりも上だがフェリスには劣る。

フェリスが負傷した状態では同程度。一体しか作り出していない。

＊ネギはこれがあまりにも見た目禍々しくて悪役チックなためよほどのピンチでないと使いたくないと思っている。

＜闇の盾を作り出す＞

魔法で加速状態のライナの魔法を防げる発動速度。

魔法が当たると消える。

でもまたすぐ発動できる。

＊このｓｓでは魔力で強化されたタカミチのスピード＝魔法で加速状態のライナと仮定する。

第四話「特に原作イベントに巻き込まれなかった中学2年」

この度、麻帆良学園男子中等部３－Ａに進級したネギです。

…えっ、２年生でのイベントはどうしたのかって？

特に何も起こりませんでした。

まあそれだけでは何なんで、簡単にこれまでのことをお話ししたいと思います。

あのタカミチとの模擬戦の後、タカミチに自分の能力である【魔法・魔力を吸収し、それが自分の身体能力を上げる】と【能力使用時に瞳に朱の十字が浮かんでいるのでこの力は魔眼じゃないか】ということを話した。

聞いたタカミチが、しばらく考え込んでいたところを見るに、僕の体に流れる【母から受け継いだ王家の血】のことを考えているのかもしれない。

なんか王家にはまれに特殊な力を持って生まれるとかそんな設定があったはずだし。

そのあとしばらくしてタカミチは「ネギ君の力は誰にも言わないから、これまで通りその力のことは公言しないように。」と言われた。

こちらから頼むつもりだったのでとても助かった。

その後、タカミチとこれからの修行について話し合ったところ、出張が度々あるために固まった時間が中々取れないことから、３つのことを重点的に行うことに決まった。

１つ目はタカミチから魔法使いとの戦い方を座学で学ぶ。

２つ目は殲滅眼の能力の詳細の調査。

３つ目は無音拳のレクチャー。

１つ目の座学はタカミチがほんの少し時間がとれたときに不定期に行われる修行で、実践豊富なタカミチから聞かされる心構えや経験談は本当に為になる話ばかりである。

２つ目の殲滅眼の能力の詳細の調査は、修行開始当初に休日などのかなり時間の余裕があるときにアーニャも交えて、かなり本腰を入れて行った。

これまで大まかにしかわかっていなかった殲滅眼もタカミチが協力してくれたおかげでより詳細に理解することができた。

簡単にまとめるとこんな感じである。

・タカミチの見立てでは、普段の殲滅眼の発動させていない状態での自動強化は、他の9歳男子の身体能力と比較するに簡易的な魔力強化以上『戦いの歌』未満ぐらい。

・殲滅眼の発動時における効果範囲は約１０m。

・魔法・精霊・魔力・気を吸収できる、ただし魔力及び気は体を強化させるなどといった使用中のものだけで、潜在的な魔力・気は吸収できない。

・殲滅眼の発動する・しないに関わらず魔法関係者には身体能力が大幅に上がっていることには気づけず、僕のことは一般人にしか見えない。

・殲滅眼の発動時の強化の度合い及び継続時間は吸収したエネルギーにより左右される。

そして、この修行は、これらのことが分かった時点で一先ず終了した。

3つ目は無音拳のレクチャーは型を教えてもらい、自主練習をしながら、週に一度ぐらいの頻度で練習成果の確認及びアドバイスをもらうという形になった。

3年生に進級した現在での習熟度は4割から5割といったところで、打ち出すところまでは失敗しないレベルまでは達したけれど、威力のほうは魔法障壁を打ち抜けるほどの威力は出せないし、タカミチみたいに顎に打ち込んで相手を気絶させられるほどコントロールも

良くないといった感じである。

まあ、英雄の奥義ともいえる技をすぐにでもマスターできるとは思っていなかったので、これからもさらなる向上を目指して頑張っていくつもりである。

いや、たった数カ月でここまでこれているだけでも、この体は十分ハイスペックなのかもしれない。

ホントは体術自体もタカミチに師事するつもりだったのだけれども、さすがにそこまで時間を作ってあげられないとタカミチに謝られた。

言われてみれば原作の師匠であるエヴァンジェリンは学生で割と暇だったし、別荘という反則技もあったのに対し、タカミチは学園の先生と悠久の風の活動の二足の草鞋をはくという忙しさである、これだけ修行に付き合ってもらえているだけでも十分だったんだなと気づいたので、こっちこそ無理を言ってごめんなさいと謝っておいた。

そういった訳で、体術の修業をどうしようかと考えた結果、部活に入ることにした。

最初は普通にボクシング部に入ろうかと思ったけれど表の人間しか在籍しておらず修業にならなさそうだったため断念、原作でも十分魔法の世界相手に活躍していた古　菲が所属する中国武術研究会に入部し、中国武術の中でも最もボクシングに似ていると言われる手技主体の翻子拳をメインで、足技主体の戳脚を補助として習うことにした。

体術の修業は割と順調に進んでいる。

型の習得速度も無音拳とは違い、短期間に習得できた時は流石に自分のチートっぷりに呆れた。

3年間続けたボクシングに今習っている翻子拳が酷似しているからかもしれないけどね。

最近は古　菲に組み手の相手を頻繁にしてもらっている。

現在黒星更新中、最近は原作の挑戦者達みたいにあっさり負けることはなくなったけれど、殲滅眼なし・アーティファクトなしでは、まだ勝てそうにはない。

タカミチともたまに修業の成果を見てもらうために模擬戦をしてもらっている。

とまあ、こういった具合に修行のほうは順調に進んでいると思う。

話を変えて麻帆良学園の魔法生徒の活動についてもここに語っておこうと思う。

魔法関係者との顔合わせはあっさりと終わった。

アーニャと僕に割と顔を合わせる機会のありそうな関係者と顔見せを行い、アーニャが火の魔法を得意とし、従者の自分は気も魔力も扱えない代わりに人並み外れた身体能力とアーティファクトの能力

を伝えてお終いといった感じである。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは紹介されなかった、彼女は魔法関係者とってはナマハゲ的存在なので怖がらせないようにという考えかもしれないが、原作通り襲ってこないことを切に願っている。

殲滅眼が原因なのか、魔力全然ないんだし。

彼女にかけられている呪いはぶっちゃけ殲滅眼を使えば解除できる気がするが、変に興味持たれて私のものになれ的なことを言われたくないので保留。

封印時はとにかく全盛期の状態だと殲滅眼アリの状態でも負けるかもしれないし、いや下手したら６００年鍛えた知恵と策謀で封印時でも負ける可能性は大いにある。

因みにアーニャはエヴァンジェリンの正体には気づいていないようである。

また、前世でよく読んだ夜の警備みたいなのはなかった、いやホントはあるのかもしれないが教えられなかった。

これまでやってきたことと言えば、困っている人を助けたり、工学部の暴走したロボットをばれない様に止めたりといったお助けマンみたいなことをしただけだった。

もちろん魔法ばれしないようにである。

アーニャは同じく火の魔法が得意らしい佐倉メイと仲良くなり、よ

く魔法の練習を一緒に行っている。

師匠はまだ見つかっていないと言っていた。

あと同じクラスの桜咲　刹那や龍宮　真名、春日　美空といった同じクラスの魔法関係者とはそれほど親密な関係にはなっていないようである。

僕のほうといえば英雄の息子とは言え、気も魔力も扱えないというハンデから魔法先生や魔法生徒からは避けられている感がある。

どういった接し方をすればいいのか戸惑っているのかもしれないが、もっと気楽に接してほしい。

続いて表向きの生活の方はというと順調の一言である。

所属しているクラスはノリが軽く、飛び級してきた天才少年という僕の前評判を気にせずに気楽に接してくれる。

勉学の方もチートな頭脳のおかげで既に大学卒業レベルがあるので楽チンである。

前世であんなに嫌だったテストもいつでも来いやといったもんである。

将来的にはいいとこの大学を出て、若いうちは程々にアーニャのミニステル・マギとして活動し、３０代にでもなればさっさと引退してアーニャと一般的なラブラブ家庭を築きたいなと思っている。

大学出るまでにいろいろ資格を取っておけば表向きの職種もかなり高給取りのものになれるはず、弁護士とか医者とかね。

まあ、平穏に暮らすのは無理かもしれないが、夢見るぐらいは許されると思う。

プライベートな時間も先生じゃなく生徒であるため、かなりのんびりできている。

クラスメイトと遊びに行ったり、アーニャとデートしたり、部活に励んだりと第二の青春を謳歌している。

アーニャも図書館探検部に所属し、中学生活を楽しんでいるようだ。

ただ、寮は長谷川　千雨と同室になったと聞いた時、やっぱ彼女は魔法の世界に巻き込まれるのだろうか？とかアーニャが影響されてネットアイドル始めたり、コスプレしたりしないか心配になった。

いやコスプレするぐらいなら可愛い彼女の可愛い色んな姿が見えてアリなのだが、ネットアイドルだと他人にも見られるのでちょっと嫌である。

長谷川　千雨がネットアイドルを隠し続けてくれることを切に祈っている。

あと最後に２－Ａのころのイベントに関してであるが、覚えている範囲に関してだけどうなったか語ろうと思う。

・宮崎のどかの転落を助け、神楽坂　明日菜に魔法ばれ→すっかり忘れてた、でもその後あった歓迎会にちゃんと元気にいたので、宮崎のどかの転落が起こらなかったか、あるいは他の魔法生徒とか魔法先生が助けたのだと思う。

・図書館島の魔法書をめざしてクエストへ→そもそも先生していないので、「女子中等部３－Ａの最下位脱出」なんて試練は与えられなかった。因みに試練はあったけど内容は「困っている人を陰ながら１０人助けましょう」というものだった。

といった具合に原作何それ？的な感じで２年生の時は割と平穏に過ごすことができた。

３年もぜひ平穏のまま終わってほしいものである……無理かな～（涙）

第四話「特に原作イベントに巻き込まれなかった中学2年」（後書き）

先生じゃないのでほとんどのイベントがスルーだった2年生時代のネギの回想の巻。

実際先生じゃないのでこの時期のイベントはネギ的には被害にさらされないと思う。

ドッチイベントはアーニャが巻き込まれているかもしれないが、ネギが主人公のためやっぱりスルー。

あと原作知識もちで、さらにそれほど接点がないため3―Aのメンバーは心のうちではみんな呼び捨て、さすがに口に出すときはさん付け。

またネギの体術が翻子拳をメインとした中国拳法に、翻子拳は古くは「八閃番」（八閃翻）または翻拳と言い、明代の著名な武術書『紀効新書』の中では、「善之善者也」（すぐれたもの（武術）の中のすぐれたもの）と評されている。

どんな武術か想像できなかったら「史上最強の弟子　ケンイチ」の34巻で敵キャラの達人が使っていますのでそちらお見るのもありかも。

しかし、主人公のネギ君はとうとう使用体術まで悪役が使っていたものに。

いったい彼はどこまで悪役ステータスを身につけていくのだろうか？

外伝その一「アーニャの『私のミニステル・マギ』」

私の幼馴染ネギ・スプリングフィールドはとっても変り者。

魔法使いの家系に生まれたのに魔法が使えない、それどころか魔力すら扱えない。

だというのに気にもせずに日々を過ごしている…いえ、たまに「魔法が使いてー！」などといったことは叫んだり、嘆いたりしているが本気で魔法が使えないことに絶望していない。

私が同じ立場だったらもっと落ち込んでると思う。

魔法学校で暮らすようになった時もネギを魔法学校の先生も生徒も皆が注目していた、何せあの英雄サウザンドマスマーの息子だしね。

でもネギが魔法を使えなくて、魔法学校に入学するわけでもないとわかると先生は興味を失ったようだし、生徒の中にはネギを馬鹿にするやつが出てきた。

だけどあいつはそんなことは全く気にもならないといった風に自然体で日々を過ごしていた……いや、たまにウゼェとかボソッと言ってたけど。

ちょっかい掛けていた魔法学校の生徒グループも、そいつらを無視

していたネギが急にリーダ格の男子と大喧嘩（ネギからの一方的なフルボッコ）をやらかしてからは何もしてこなくなったようだし。

そんな感じでネギはマイペースに普通の勉強をしたり、最近始めたボクシングに打ち込みながら日々を過ごし、私は私で魔法使いとしての勉強を頑張る日々を過ごしていた。

そして、私の魔法学校卒業も近付いてきたある日、ネギが突然こんなことを言ってきた。

「ねえ、アーニャ。前に言ってた僕をアーニャのミニステル・マギにってやつはまだ有効？」

「へっ？」

「いや、だから僕がアーニャのパートナーになるって話だよ。ほら、かなり前のことだけど。」

「・・・。」

……こっ、これはあれだろうか、私は今ネギにプロポーズされているのだろうか？（アーニャの脳内：異性のパートナー＝将来結婚）

「ななな、何言ってんのか分かってんの？あれよ、パートナーになるってことは将来はけけけ、結婚……」

「分かってるよ。僕はアーニャのこと大好きだし、全然問題ないよ、っていうかむしろ望むところ。で、アーニャはどうなの？」

なっ、なんてことをこいつは恥ずかしげもなくさらっと言うのよ、いや別に嫌じゃないって言うかむしろうれｓ……いやいや落ち着け私。

「ふ、ふん。まあ、あんたが、ど～～～～～してもって言うなら私のパートナーにしてあげなくもないけど？」

「うん。僕はどうしてもアーニャのパートナーになりたいんだ。」

「なっ。」

私の顔はきっと真っ赤に染まっているに違いない。

そして、ここまでストレートに言われると私も素直になるしかないじゃない。

「わわわ、私もあんたのこと好きよ。じゃ、じゃあ。これからよろしく。ネギ。」

「うん。よろしく。アーニャ。」

とまあこんな感じであいつとパートナーという関係を築くことになったんだけど、ここで終わりではなかったのだ。

あの馬鹿は私にこんなことを言ってきた。

「アーニャ、実は誰にも言ってなかったんだけどさ、僕には変わった力があるんだよ。アーニャとはパートナーになったんだし、教えておこうと思うんだけど。」

そしてあいつが私に伝えてくれた力、魔眼の一種らしいのだが、精霊や魔法・気を吸収してその分だけ自分の身体能力を上げたり、傷を癒したりできるらしい。

普段も周りの魔力を勝手に吸収しているらしく、魔法を吸収した時ほどではないにしろ身体能力が上がっているんだって、…なんてデタラメ。

実際に見せてもらったけど、私の魔法を吸収した後の動きは凄かった。

なんていうか、私たち魔法使いや気を使う戦士の天敵みたいな能力で無敵じゃないかと思ったけど、弱点や問題点も色々あるらしい。

実際、魔法が使えないどころか、魔力も扱えない原因はこの魔眼のせいじゃないかとネギは考えているらしい。

私たち魔法使いみたいに魔法障壁が張れないので、銃みたいな近代兵器での攻撃には、不意を突かれれば防ぎようがないし、魔法を吸収した時はともかく通常時では避けきれないと思うとも言っていた。

でもまあ、そういった長所と短所は誰にでもあることだし、私と2人で補い合っていけばいいと思う。

その後、ネギとパートナーにはなったけど仮契約はまだ結ばずにいた。

…だって、キスよ！

乙女の唇、しかも始めて捧げるんだから、最初は契約とは関係なくムードとかを大事にしたいじゃない？

パートナーになるときはネギの眼のことでそんな雰囲気も吹き飛んじゃったし。

両想いなのはわかったんだし、魔法学校もまだ卒業していないんだから、別に仮契約は急ぐ必要はないんだからね。

まあ、乙女心ってやつよ。

ネギにもそう言うよ、解ったとは言ったけどなんか残念そうにしていた。

…そ、そんなに私とキ、キスしたかったのかしら？

も、もう、しょうがないわね、バカネギは。

乙女の唇は安くないんだからね！

そんなこんなで、私とネギはパートナーになったこともあって、一緒にいる時間もこれまで以上に増えた。

学校が休みの日にもよくウェールズの町に二人で出掛けるようになったんだけど…。

それは、そんないつものように二人で街に買い物に出かけた帰りのこと。

いつも通り、私はネギに私の寮の部屋の扉の前まで送ってもらっていた。

そして、扉の前に立った私の耳には、誰もいるはずのない部屋の中からくぐもった声が聞こえてきた。

気味が悪くなってネギの方を向けば青筋を立てたネギの顔が…。

私にはよく聞こえなかったけれど、常時眼の力で身体能力を強化されているネギにはばっちり聞こえていたらしい。

後で聞いたところによると、「グヘヘヘヘヘ、今日の下着は大漁だぜ。」とか「ムッハー、いい匂い～。」とか聞こえたらしい。

そして、それを聞いたネギは自分を見る私に「ここで待っていて。」

とだけ言うと

「どこのどいつだ、変態野郎！」

と叫んで、私の部屋に飛び込んで行った。

そして、ドアが開かれて私が見た光景は予想に反したものだった。

部屋の中で、ネギが捕まえようとしていた変態はなんとオコジョ。

しかもネギに追いかけまわされながら、わめいているのでタダのオコジョじゃなくてオコジョ妖精！

オ、オコジョ妖精が下着ドロ…私の中の妖精のイメージが…。

私があんまりな出来事にフリーズしている間にもネギとエロオコジョの追っかけあいは続いていた。

「いい加減あきらめろ、このエロオコジョ妖精！」

「ヘン、このオレッチが、お前みたいな子供に捕まるかってんだよ。」

狭い部屋の中とは言え、常に強化されてるネギから逃げ延びてるなんて、なかなかやるわね、あのエロオコジョ。

「アーニャの下着を…、絶対許さないからな。アーニャ、魔法を！」

「へっ、…うん、わかった。フォル・ティス・ラ・ティウス・リリス・リリオス　風の精霊3人・縛鎖となりて・敵を捕まえろ・魔法

の射手・風の3矢」

慌てて私が唱えた捕縛魔法がオコジョに向かって飛んでいく。

「オコジョ妖精のオレッチに、魔法学校もまだ卒業していないお嬢ちゃんの捕縛魔法なんかが当たるかよ。」

言葉の通り、私の捕縛魔法はエロオコジョにかわされてしまった、…ムカツク。

でも私は炎系の呪文は得意なんだけど、他の魔法はそこまで得意じゃないのよね〜。

私の部屋で炎系の呪文使う訳にもいかないし。

「しかたない、僕のアレを使う。アーニャ、もう一度魔法を。」

もしかして、眼の力を使うつもり、力の秘密がバレたらどうするつもりよ。

「アーニャ！」

駄目だ、バカネギのやつ頭に血が上ってる。

本来、下着を取られそうになった私がキレて怒り狂ってる所なんだけど、バカネギの奴が暴走してるせいで変に冷静になっちゃってるわ。

まあ、一回見たぐらいじゃわかるわけないし、大丈夫よね。

「しょうがないわね。フォル・ティス・ラ・ティウス・リリス・リリオス　風の精霊３人・縛鎖となりて・敵を捕まえろ・魔法の射手・風の３矢」

「ヘン、どご狙ってやがんだ。へたくそ。」

「『力を喰らう。』」

ネギの言葉と同時にネギに向けて放った私の魔法がかき消える。

「ギャプ。」

と思った瞬間にはもうエロオコジョはネギの手に捕まえられていた。

相変わらず魔法を吸収？した後のネギの動きはデタラメよね。

「ふ～、やっと捕まえた。アーニャ、僕はこれからこいつを校長先生につき出してくるよ。」

「ヒー、勘弁してくだせ～。オレッチには年の離れた弟妹が～。」

「そんなことは関係ない、このエロ犯罪オコジョ。じゃ、ちょっと行ってくるね、アーニャ。」

「う、うん。」

その後、ネギが校長先生につき出したオコジョは名をアルベール・カモミールといって、なんと他でも下着を盗んでいたようで下着２０００枚を盗んだ罪で服役することになったらしい。

このことを聞いた時、私は下着を２０００枚って…と呆れたものだったけれど、ネギの奴は「あいつだったのか。」とか言いながらなんか納得していた。

その数日後のことだった、そんなことは記憶の向こう側においやられていた私たちに来客？があった。

それは、あのエロオコジョより一回りも小さい、幼いオコジョ妖精だった。

「あわわ、私の名前はフランシーヌ・カモミールっていいましゅ。この度は兄のアルベールがご迷惑をかけて申し訳ありましぇん。」

…かわいい。

しかも、あのエロオコジョには似ても似つかない良い子みたいね。

ネギの方は、「あいつホントに妹いたんだ。」と何やらつぶやいていた、どうやらカモミールがその場しのぎの嘘をついていたと思っていたらしい。

彼女の話だと、他の下着を盗まれた人は一般人だったのでその人のうちにお詫びの品をこっそり置いていくしかなかったそうなんだけど、私たちは魔法使いとその関係者だったので直接お詫びに来たらしい。

ネギも「良い子だ。」と言いながら眼がうるませている。

「そ、それで、でしゅね。兄のご迷惑をかけた償いとして、私をあなたの使い魔として働かせてもらえないでしょうか？私、頑張りましゅから。」

うーん。確かに今私には使い魔はいないし、オコジョ妖精といえばパクティオー契約の魔法陣を使えるんだったわよね？

この子も良い子みたいだし、ちょうどいいかしら？

それになにより、かわいいし。

ネギの方をチラッと見れば、いいんじゃないっといった感じの目をしてるし。

「いいわ、OKよ。よろしくね、フランシーヌちゃん。」

「あわわ、よろしくお願いします、アーニャしゃん、ネギしゃん。私のことはぜひフランと呼んでくだしゃい。親しい友達はみんなそう呼んでくれていましゅ。」

「「よろしく、フランちゃん。」」

こうして私に、パートナーのネギに続いて使い魔のフランちゃんが私の仲間になったのでした。

その後、フランちゃんの協力の元、ネギと私は無事仮契約を行った。
ネギの眼のこともあるので無事に仮契約が結べるのか不安だったけれど、無事成功して本当によかった。
ちゃんとファ、ファーストキスは済ませてからしたわよ。
あのエロオコジョの件で私のことで私以上に怒こってくれたことはうれしかったし、まあご褒美にキスしてあげた。
不意打ちぎみにネギの唇を奪った時は、ネギの顔は真っ赤になっていた、パートナーになりたいと言ってきたときは真顔で好きだとか言ってきたのに。
どうやら受け身になると照れるらしい。
まあ、私の顔も負けず劣らず真っ赤になっていただろうけどね。
それはさておき、無事仮契約を済ませてアーティファクトを確認したネギが
「……こ、黒叡の指輪って、なんで、こうもことごとく悪役臭い能力ばっか…」
と訳の分からないことをブツブツ言いながら落ち込んでいた。
ホント何でだろう？

かなりレアなアーティファクトだと思うし、普通はもっと喜ぶもんじゃないのかしら？

まあ、こんな変わり者で、お馬鹿で、でも私の大好きなネギが私のミニステル・マギよ。

外伝その一「アーニャの『私のミニステル・マギ』」（後書き）

今回はアーニャがヒロインなのに目立っていないのでメルディアナ魔法学校時代のアーニャ視点での話を書いてみました。

アーニャに仮契約を申し込むとこうなるだろうな～と想像しながら書いてみた。

男の自分には女の子視点で文章を書くのはほんとに難しい。

読者のみなさんの反応がかなり怖くて結構ビクビクしております。

そしてこの作品の最初のオリキャラというかオリオコジョ登場！

原作でもカモがときどき口にしていた故郷の弟妹の一人、フランシーヌ・カモミールちゃんです。

本作のネギ君は眼のせいでたびたび契約が切れるため、仮契約を結ぶ手伝いをしてくれる原作のカモのような仲間が必要不可欠でした。

魔帆良の関係者に度々仮契約の魔法陣を頼むと、理由を聞かれるでしょうし、殲滅眼のことを知られるきっかけになりかねません。

カモをそのままアーニャの使い魔にとも考えましたが、原作のお人よしのネギはともかく女の子のアーニャがあのエロオコジョを自分の使い魔にするとは思えませんでした。

そこで作ったのがカモの妹フランちゃんです、イメージは真・恋姫†無双の鳳統、フランはオコジョですけど。

彼女は魔帆良にもついてきていますが、アーニャの使い魔として彼女のそばにいたのでこれまでは登場していませんでしたが、これからは魔法関係のイベント時にちょこちょこ出していくかもしれません。

ただカモよりも幼いので戦場には出張ってこないはず、たぶん。

幕間「中国武術研究会での修行」

中国武術研究会の道場で2人の若者が向き合っていた。

方や赤毛の幼い少年、もう一方は小麦色の肌をした少年より少しばかり年上の少女。

2人はお互いにじりじりと少しずつ間合いを狭めていく。

先に動いたのは赤毛の少年、一足飛びに相手に近づき両の手から猛烈な連続突きが繰り出される。

その様子は正に、雨が降り注ぐごとく、爆竹が鳴り続けるごとく。

対して少女は少年が放つ拳の弾幕をことごとくかわし、あるいは受け流す。

少年と少女の攻防が膠着し、短くない時間が過ぎたその時、嵐の如き連続突きの一つを少女は自身の後方へと巧みに受け流し、少年の体勢を崩させる。

バランスを崩された少年は、連続突きを止めてしまう。

少女はそれを見逃すことなく、隙の出来た少年のわき腹めがけて渾身の崩拳を突き出す。

少年もタダではやられぬと、体勢を崩された流れに逆らわず、今までの突き主体の動きを打って変って後ろ回し蹴りで迎え撃つ。

しかし、その足掻きもむなしく、蹴りが彼女に届く前に少女の崩拳が少年の身に突き刺さり、少年は後方に吹き飛ばされて、壁に叩きつけられたのだった。

組み手が少女…古の勝利という結果で終了し、彼女は自分に吹き飛ばされた少年…ネギに話しかける。

「まだまだ、技と技とを繋げるのに間が出来てしまっているネ、ネギ坊主。特に翻子拳と戳脚の切り替えの間は致命的アル。間がなかったら、さっきのも相打ちに持ち込めていたかもしれないアルよ。」

ネギも痛む体に活を入れて立ち上がりながら、なんとか彼女に言葉を返す。

「イテテテテ、これでも出来るだけ間をなくそうとしているんですけど、なかなか難しくて…。」

「まあ、この短期間で翻子拳の型は様になってきているだけで、十分デタラメなことアルが、ボクシングやってたせいか、足技はぎこちないアル。まだまだ修行の余地ありネ！」

「はい、がんばります。」

「うむ。それにしても、私とここまでまともに組み手が出来るものが我が中国武術研究会にはいなかったアル。ネギ坊主が入会してくれて、私としても鍛錬がはかどって大助かりネ。ネギ坊主がアーニャの彼氏でなかったら、私の婿候補にしていたところアル。」

その言葉が出たとたん、彼らの組み手を見学していた他の研究会の男どもから大人げない嫉妬の視線が突き刺さる。

その嫉妬の視線をもろに受けたネギは苦笑いするしかなかった。

「アハハハ、誉め言葉として受け取っておきます。でも僕にはアーニャがいますから…」

「アハハハ、冗談アル。私としてもクラスメイトの思い人を奪おう等とは思っていないアルよ。」

そうして、組み手を行った2人は、冗談を交えつつも朝練の後片付けを行い、それぞれ自分の教室に向かっていくのだった。

～ネギｓｉｄｅ～

ども、中学3年生になり、中国拳法の修業に日夜励んでいるネギ・スプリングフィールドです。

いや～、なかなか古先輩から一本がとれません。

拳法の型を覚えるのは自分でもびっくりな習得速度なのですが、組み手での攻め方や技の組み立てが中々様にならず、毎度のごとく古先輩との組み手は黒星更新の日々です。

やはりこういうことは鍛錬あるのみで、そうそうとうまくはいかないモノなんですね。

いや、それでも最初のころと比べれば、組み手の時間もだいぶ延びてきて頑張っている方なんですよ。

それにしても、黒星更新に関しては男としては悔しいものですが、この古先輩との組み手に関して言えば、最近の自分の楽しみの一つと言っていいと思います。

裏に関わる危険な戦闘は勘弁というスタンスは今も変わりませんが、こういった純粋に武を研鑽し、相手と競い合う組み手は楽しいものなんですよ。

自分も男の子、強くなるということ自体には憧れがありますしね。

現在は殲滅眼の力やアーティファクトの力なしのスタンダードの状態で古先輩から一本取ることを目標にしています。

まあ、武術家として先達である古先輩から一本取るにはまだまだ道

のりは険しいですが、目標は高ければ高いほどいいですから。

タカミチとの修行も、割かし順調です。

ついに無音拳を素の状態で確実に顎を打ち抜ける程度にはなりました！

まあ、タカミチ程の威力・精度はありませんが、アーティファクト以外でのミドルレンジの攻撃手段を身につけられたことは大きいと思います。

見た目、何をしているか解りづらく、ばれたとしても拳圧飛ばしているだけなので魔法バレの心配がないですから…まあ、ビックリ技ではありますがね。

中国拳法だけで古先輩から一本取ると決めているのと、奥の手として隠しておくために中国武術研究会では使ったことがありませんが、たまに古先輩との組み手の後に、無音拳を使いたいという誘惑に駆られる時もあります。

やっぱ、負け続きは悔しいですから…。

そして、残念ながら殲滅眼の発動時にタカミチのような豪殺居合い拳のような高威力の無音拳は打てませんでした。

あれは咸卦法によって強化したものらしいので、身体能力が強化されているだけの状態の自分では無理っぽいようです。

しかし、眼にも止まらぬ速さで動ける殲滅眼発動時であれば、タカミチでも不可能な無音拳の雨霰の如き連撃が可能となったのです。

まあ、威力自体はそれほど上がっていないので、１０トンクラスの攻撃を防ぐ風障壁のような防御魔法を使うなり、防御力の高い魔法障壁を張られれば撃ち抜けないんですけどね（涙）

近づいて、相手の魔法吸収すれば防げないでしょうが、そこまで近づいてるなら直接殴った方が早いですし…。

そんな訳で、やっぱり殲滅眼発動時はミドルレンジの無音拳より、ショートレンジでの中国拳法のような格闘技術が大事になってくると思っています。

とまあこんな具合に原作なんて知ったこっちゃねえってな感じに武術に青春の熱き情熱をかけながら人生生きてます。

どうやら、タカミチに弟子入りしたおかげか、桜通りの吸血鬼事件も起こらず、エヴァンジェリンに襲われることもなさそうです。

眼のせいか、魔力全く持ってないので、僕の血を吸ってもおそらく封印が解けない所為もあると思います。

大魔法使いである彼女なら、僕に魔力が全くないのにも気づいているでしょう。

いや、そもそもイギリスにいる頃から、僕が割と魔法使いとして決定的に落第生であることは知られていたことなので彼女はこの地に僕が来る以前からそのことを知っていた可能性もあります。

魔法関係者と顔合わせしていた時もいなかったですが、どっかで見てたかもしれませんし。

とまあ、こんな感じで、知ってる原作の流れと全く違う流れに進んでいくこの日常は僕としては嬉しい限りです。

やっぱり何が起こるか分からないからこそ人生楽しいんであって、決まったレール通りに生きるなんて面白くもなんともないしね！

現在も修学旅行がハワイになるようクラスでプッシュ中。

前世でも日本から出たことないのでぜひとも行ってみたい。

今なら、英語ペラペラだし海外旅行はエンジョイし放題である！

男子中等部なのでクラスメイトもハワイの希望者が大多数を占めているので、京都に行かなくて済みそうである。

アーニャの方は残念ながら京都行になりそう。

アーニャを始め留学生が多いあのクラスは、日本の文化を彼女たちに知ってもらおうと京都行きを決定したらしい。

アーニャも精進料理や京料理を食べてみたかったらしく京都行きをプッシュしているらしい。

…京都でのあの事件は起きるのだろうか？

まあ、京都での事件はタカミチが担任のままだから、親書の件があるなら、タカミチが無事届けるだろう。

近衛木乃香を誘拐し、スクナを復活させようとする天ヶ崎　千草一味もタカミチなら見事守りぬいてくれるはず。

フェイトと戦うのは流石にタカミチもきついかもしれないが、タカミチ程名の知れた強者が付いて行くんだから、天ヶ崎　千草がビビって行動自体起こさないかもしれないし。

タカミチなら…タカミチならきっとうまくやってくれるはず！

タカミチ信じているからね（↑丸投げ）

幕間「中国武術研究会での修行」（後書き）

ボチボチと強くなってきているネギの巻。

幕間なんで文章短いめ。

次回から修学旅行編に突入しますが、ネギはハワイに行くので最初は京都での事件に関わりません。

ネギ参戦は途中からの予定です。

このネギが京都編に危機感持っていないのはタカミチが担任にいるという安心感とアーニャが無事なら他はどうでもいいからです。

まあ、ここのネギは３－Ａのクラスとは係わりが薄いですし、濃い付き合いしている古やパートナーのアーニャは巻き込まれることは少ないだろうと思っているので。

実際、古は夕映がみんなと同じように石化されるなり、西の本部にいなければ助っ人に呼ばれることもなく裏に関わることはなかったでしょうし、アーニャは見習魔法使いなので、タカミチがいるなら厄介な仕事は頼まれないだろうと思っています。

アーニャと同じような立場の美空も原作で巻き込まれずに済んでますし。

まあ、巻き込まれるんですけどｗ

他にもアスナが魔法に関わっていなかったりと色々と原作とは違う

ので、原作とだいぶ違う展開になってくると思います。
美空にある意味活躍してもらう予定。

あと伝説の勇者の伝説最新刊読みました。
最近の乙女なフェリスの可愛さはマジでヤバイですね。
それにしても、ライナパパがティーアに言った地面の下で発動した魔法は吸収できないという設定はどうしたもんか…
フェイトの土系魔法でこの設定に該当していそうな魔法あるかな？
ちょっと悩んでます。
これについて、みなさんの意見・解釈を教えていただけると嬉しいです。
感想も待ってますので感想もいただけるともっと嬉しいです。

第五話「さらばハワイ、こんにちは京都」

エヴァンジェリンとの戦闘もなく、おそらく修学旅行の事件も巻き込まれないし、タカミチがいるから事件がおこっても大丈夫だろうと安心しきっていたネギです。

そうして僕は平穏無事に修学旅行を過ごせると思い、ハワイでの一日目を楽しんでいました。

そんな僕の平穏は、一日目の予定も終わり皆が寝静まった深夜3時頃担任の弐集院先生が学園長からの電話を取り次いできたことで終了した。

「もしもし、ネギ君かの？」

「はい、ネギですけど、一体こんな夜遅くにどうしたんですか？」

…眠む、…こんな時間に学園長から連絡…声に焦りが感じられるし、まさか。

「それがの～、君のパートナーのアーニャ君のクラスが京都に修学旅行に行っとるのは知っとるかと思うが、そこでつい先程孫の木乃香が関西呪術協会の過激派と思われる者達に誘拐されかかっての。」

「へっ？」

…誘拐事件…起こったのか、こっちの業界で実力者として名の売れてるタカミチがいたら相手も手を出さないと思ったんだけどな～。

「それに気付いた木乃香の護衛の刹那君と、君のパートナーのアーニャ君が協力して救出してくれたんじゃが、犯人たちは取り逃がしてしまったみたいでの。目的は」

「ちょ、ちょっと待ってください。アーニャは怪我とかしてないですか？それに、タカ…高畑先生はどうしたんですか？　高畑先生がいるのに近衛さんが誘拐されるなんて思えないんですけど。助けたメンバーの中にも高畑先生の名前がないですし、一体どういうことなんですか？」

アーニャ係わっちゃってんの？

というか大丈夫なの？

たしか、誘拐犯の千草ってねーちゃんが火傷じゃ済まないようなデッカイ炎を出す術を原作で使ってたような…。

いや、そもそも原作のネギの代わりにアーニャがいる分、事件の内

容も全然違った展開になってる可能性もあるのか？

そんでもって、なんでタカミチの名前が出てこないの？

タカミチの実力なら取り逃がすことはないはずなんだけど…フェイトに足止めされてたとか？

「落ち着くんじゃ、ネギ君。アーニャ君たちは大きな怪我もしとらんようじゃし、大丈夫のようじゃ。タカミチ君はの～。本来なら担任としてクラスを引率しとったはずなんじゃが、出発する間際にタカミチ君レベルの者でないと解決できん問題が海外で起こっての、急遽出張することになってしまったんじゃ。」

「……。」

なんというバットタイミング。

というか、それって偶然というよりはタカミチが修学旅行に来られない様に千草一味を援助してる誰かが裏で手を回したんじゃね？

そういえば、修学旅行3日目に西の本山が襲撃されて、西の長の近衛詠春が石化する直前に西の手練の部下達は出払ってるとか言ってたような…よく覚えてないけど。

これも、誘拐犯関係者の裏工作だったりして？

改めて、自分が関係者になって考えてみると…こっち側色々と詰んでね？

「それで話を戻すが、以前ネギ君達が学園に来た際に説明した通り、

孫の木乃香はその内に眠る魔力は莫大なものがあるが、親の意向でこちら側のことは知らせておらん。今回の事件も誘拐犯が魔法で眠らせていたようでの、木乃香は誘拐されかかったことに気付いておらん。このまま無事修学旅行を終えるためにもネギ君には悪いんじゃが、朝一の飛行機に乗って京都に向かってくれんかの。アーニャ君の従者として木乃香の守る助けになってほしいんじゃが。」

「……修学旅行中止にするなり、魔法のことは言わないまでも誘拐されかかったことを近衛さんに話して彼女を学園に戻すとかしないんですか？　そちらの方が安全だと思うんですが？」

普通誘拐されかかって、犯人捕まってないのにそのまま旅行続けるってあり得ないよね！

失敗したからビビってもう誘拐しに来ない可能性もあるだろうけど、また来る可能性も十分あるだろうし。

近衛さんは誘拐されかかったことを自覚してないから仕方がないかもしれないけどさ。

原作のメンバーはなんで修学旅行を続けるって選択肢をとったの？

近衛さんを取り返して、敵が逃げてった時点でなら京都から楽に出れたんじゃないかな？

「ネギ君の言うこともわかる。しかし木乃香には出来るだけ何も知らずに修学旅行を楽しんでほしいと思っておる。それに京都での予定を変更して無理に離れるとなると誘拐犯も焦ってもっと無茶な方法をとり周りに大きな被害がでるかもしれんからの。それに向こうは一度失敗しているわけじゃから、こっちが警戒しておれば諦める

という可能性もないとも言えんからの。」

「はあ…。学園長がそう言うのでしたら僕は構わないんですが、それじゃあ僕以外に京都へ応援に行くのは誰になるんですか？」

「それがじゃの～……申し訳ないんじゃが、ネギ君だけなんじゃよ。」

「はい！？」

いや、確かに原作でもスクナ復活の時点でエヴァンジェリンが来るまで誰も応援に来なかったけどさ。

実際、誘拐されかけたわけだし、通常より守りを固めるのが普通なんじゃないの？

無事取り戻したとはいえ一度誘拐されてるんだしさ。

「ネギ君は不思議に思ってるかも知れんが、関東魔法協会と関西呪術協会の仲があまり良くないこの状況で本来の予定に入ってない武闘派の魔法使いを送るのはかなり難しくての。その点ネギ君はすでに京都にいるアーニャ君の従者じゃから問題ない。魔法使いと従者はそばにいて当然じゃからの。」

「でも、近衛さんが誘拐されかかる非常時なんですから、この場合は四の五の言ってられない状況なんじゃないんですか？」

「うむ。こちらとしてもそうしたいのは山々なんじゃが、西の反魔法使いの者達を納得させる証拠がないんじゃよ。せめて誘拐犯たちの内一人でも捕縛出来ていれば話は違ったんじゃが、奴らの内の一

人が使った符ぐらいしか物的証拠が残っておらんでの、これでは西の者も身内の術者が犯人だとは認めんし、それどころか誘拐事件のことを伝えても起こったことすら認めんかもしれん。木乃香は無事じゃし、本人は覚えてないからの。」

「な、成程。」

そっか、そういう見方もあるのか。

千草一味のバックアップをしいてる勢力が関西呪術協会の中にいたとしたら、そりゃ当然増援が来ないように働き掛けるだろうし、例えいなかったとしても仲の悪い関東魔法協会が自分の懐に予定外の戦力を送ってくるなんてことを関西呪術協会の反魔法使いの人達はよっぽどの証拠がないかぎり認めない…のか。

で、僕は既に現地にいる魔法使いの従者だから、先方も強く反対できないと。

「まあ、増援に行くのはネギ君だけじゃが、あっちにおる魔法生徒の春日君と魔法生徒ではないが関係者の龍宮君にも協力するようにいっておる。彼女はかなり優秀じゃからきっとよい助けになってくれるはずじゃ。」

「解りました。そういうことでしたら朝一の飛行機に乗って京都に向かいます。」

へぇ、既にあの仕事人なスナイパー・龍宮さんとやる気はなさげだけど機動力はかなりのものがある春日さんが協力してくれるようになってるんだ。

やっぱ、僕が魔法先生やってないことや、神楽坂さんがこちら側に関わってないこととかが影響してるのかな？

「うむ、よろしく頼むぞい。もし再び木乃香を襲われるようなことがあった場合、そちらの判断で関西呪術協会の長をやっておる木乃香の父の所に避難するのも手じゃ。婿殿はこちらに対しても隔意はない、きっと助けてくれるじゃろう。案内は刹那君に頼むといい。それから、京都では一般生徒に気付かれないように十分注意して欲しい、本来いないはずのネギ君が京都にいるのが知られると不味いからの～。ハワイの方は弐集院先生が身代わりの式を使ってごまかしてもらうからの。」

「解りました。それでは今から準備するのでこれで…。」

うん、普通ならいざという時の良い避難場所があると解ってありがたい話なんだろうけど僕としてはそこの守りをぶち破ってまんまと誘拐される可能性が大いにあるって知ってるからな…び、微妙だ。

もし、西の本山に逃げ込むことになったら近衛さんを送り届けた後、僕とアーニャ帰っちゃ駄目かな…駄目なんだろうな。

それに身代わりの式…暴走するイメージが強すぎてめっちゃ不安だ…魔法先生がコントロールしてるんだから…だ、大丈夫…だよね？

「うむ。それではの。」

「……ふう。」

電話を切ると同時にため息がでてしまう。

戦力的な意味では原作よりだいぶましとはいえ、タカミチがいないというのは不安だ。

タカミチがいてくれればかなり安心できたんだけどな。

しかし、学園長からの連絡で話に出てなかったということは、ここでも神楽坂さんは魔法に関わっていないのかな。

ぜひこのまま係わらず平穏に過ごしてもらいたいものである。

神楽坂さんが係わっておらず、エロオコジョのカモがいないおかげで３－Ａの一般の女の子たちがこの件に関わってくる可能性もかなり低い。

この件に関わっている龍宮真名・桜咲刹那・春日美空はアーニャと僕より先達で素人が係わっていないのだから、こっちがフォローに回らなければいけないなんてことはないだろう。

龍宮さんと桜咲さんは頼りになる戦力だし、春日さんはあの逃げ脚があれば近衛さんを担いで先にその場から離脱もらうなんてこともできるはず。

皆頼りになる存在だから、僕としてはアーニャを守ることを優先できる、僕はアーニャの従者なんだから魔法使い的にもそれが普通だし。

きっとアーニャはクラスメイトで部活仲間の仲のいい友達である近衛さんのために無茶するだろう。

無茶してアーニャが大怪我しないようにしっかり守らなければ。

贅沢を言えば、正直めちゃくちゃ頼りになる戦力だと分かってる忍者の長瀬さんと拳法家の古先輩には是非協力してほしいけど一応一般人だからな～、実力的には既に脱・一般人的な存在だけど。

それに切り札の殲滅眼をフルに使えれば楽なのだろうけど、敵にはあのフェイトがいるだろうから眼をつけられないように自粛しなければいけない。

あいつに魔法無効化能力者だと勘違いされたらたまったものじゃないし、この眼の力を正確に理解されてもそれはそれで注目されてしまうだろうから。

なんとか、僕のアーティファクトと普段の力でこの件を乗り越えなければ。

まあ、とりあえずは学園長に言われた通り僕は京都にいるはずのない人間だから、３－Ａの一般の女の子に見つからないように距離をとってアーニャ達を見守っていく感じになるのかな。

一応認識疎外魔法のかかった伊達眼鏡をつけとこ。

因みにこの認識疎外魔法のかかった伊達眼鏡のお値段日本円で約３００万円しました。

割と強力な認識疎外魔法がかかっているのでかなり高かった。

お金は僕に残された遺産から出した。

割と大金が残されており、原作のネギの趣味である魔法具コレクションの資金もここから出したんじゃないかと思われる。

原作で龍宮さんが一回こっきりの転移符が８０万したと言っていたように、認識疎外魔法のかかった装飾具や魔法銃・転移符などといった貴重だったり、便利な魔法具はかなり値が張るので。

因みに僕は魔法具収集していません。

興味がない訳じゃないけど、お金がもったいないし、普通に手に入る魔法具はそこまで強力なものはないので。

実際魔法銃だと一発の威力は魔法の矢一発と同程度、大金出してまで買おうとは思えませんでした。

回復薬みたいなのも、僕の場合はいざとなったらアーニャに魔法を打ってもらって殲滅眼で食べればいいのでいらないし。

そういう訳で魔法が使えない僕は認識疎外魔法代わりのこの眼鏡と

いざという時のための逃走用転移符を数枚だけまほネットで購入するにとどめている。

さて、弐集院先生のとこ行ってこっちのことをお願いしたらクラスのみんなに見つからないうちにホテルから離れよう。

…アーニャ大丈夫かな～。

第五話「さらばハワイ、こんにちは京都」（後書き）

まず始めに5カ月近く更新できなくてすみません。

話の筋道はラストまで考えているのですが、それを文章にするのがなかなか難しくこんなに遅れてしまいました。

ちなみにアーニャから事件の連絡が来ないのは海外でも通じる携帯をネギが持っておらず、アーニャはネギの宿を知らないためです。

アーニャと刹那が学園長に報告し、龍宮・春日の協力要請とネギの派遣を決定し、学園長がネギに連絡してきた流れです。

実際、ネギ達って原作では木乃香が最初に誘拐されかかった時点で学園長に報告してたんだろうか？

していたとしてスクナ復活まで正式な援軍が来ない理由を自分なりに考えて書いてみました。

旅行を中止していない理由は苦しいかもしれませんが、学園長がネギに話した理由と犯人を取り逃がしたとはいえ一度撃退を成功した若干楽観視しており、そしてこれを機に木乃香が魔法を知るように持っていきたいと思っているいうことで一つ。

実際原作で旅行をやめなかった理由が自分にはこれ以上浮かびませんでした。

わざわざハワイのネギを京都に向かわせる理由もこういう流れにしてみました…おかしくなければいいんですが。

ここら辺の理由付けが更新を手間取った一番の理由です。

そして、これからはアスナが係わっておらず、エロオコジョもいないのでここから色々違った展開や原作とは違う人物に活躍していってもらうつもりです。

【追加補足】

もう一つの投稿先で仮契約の召喚機能を使ってアーニャのもとに行かないのかという質問が多いので補足を。

仮契約の召喚機能の最大距離は１０ｋｍ程度のようなのでハワイからは仮契約の召喚で帰れません。

魔法世界でネギたちがフェイトに強制的にバラバラに転移されたときに茶々丸が距離制限について言っていました。

なので、カードの通信機能もその程度の距離内でないと無理ということにしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2571m/

殲滅眼を持ちし者

2010年12月9日20時18分発行